

『宗教についての異議』¹と「神聖なる商売」をめぐる対話 ——シャール、ボシュエ、シモン

藤原真実

フランス理神論の先駆けとして知られる哲学的地下文書『マルブランシュ神父に呈する宗教についての異議』は、18世紀初頭に書かれたと考えられている。ヴォルテール、ディドロをはじめとする啓蒙期の哲学者らに大きな影響を与え、1767年にはドルバックとネジョンによって大きく書き換えられ、『軍人哲学者』と題されて印刷された。しかし『異議』本体はその後地下に埋もれたまま、20世紀後半になるまで著者も知られなかった。1912年にランソンがその記念碑的論文²のなかで『異議』の写本の発見にふれて地下文書研究に先鞭をつけると、作者の正体を突き止める試みがブルマー（1932年）、ウェイド（1967年）、モルチエ（1970年）、ロビネ、ドロップルなどの研究者によって次々と行われた。³『異議』は地下文書としては例

¹ 本稿における本書への言及は、特別な場合を除いて、すべて以下の二つの版にもとづいて行う。Robert Challe, *Difficultés sur la religion proposées au père Malebranche*, Frédéric Deloffre et François Moureau éd., Genève, Droz, 2000. 略号: *Difficultés*. ロベール・シャール『宗教についての異議』, 藤原真実訳, 野沢協監訳『啓蒙の地下文書II』法政大学出版局, 2011年. 略号: 『異議』.

² Gustave Lanson, « Questions diverses sur l'histoire de l'esprit philosophique en France avant 1750 », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, XIX, 1912, p. 1-29.

³ Rudolf Brummer, “Studien zur Aufklärungsliteratur im Anschluss an Naigeon”, dritter Abschnitt: “*Le Militaire philosophe*”, série Sprache und Kultur der germanischen Völker, C. Romanische Reihe, Band XI, Breslau, 1932, pp. 240-301; Ira O. Wade, “Le Militaire philosophe”, dans: *The Clandestine Organization and Diffusion of Philosophic Ideas in France from 1700 to 1750*, Princeton, New Jersey, 1938; rééd. en 1967, *Octagon books inc.*, New-York, chapitre II; Roland Mortier éd., *Difficultés sur la religion proposées*

外的に作者の自伝的記述を多く含んでいるが、それらをパズルのようにつなぎ合わせていくつもの「モンタージュ」が作成されたのである。最終的にはカザノヴァ研究者フランシス・マルスの論文⁴が決定打となり、『フランス名婦伝』*Les Illustres françaises* (1713)の著者ロベール・シャールを『異議』の作者と見做すことに多くの18世紀研究者が賛同した。その結果、1983年に『異議』ははじめてロベール・シャールの著作として印刷される一方で、シャールを著者と見做すことに異議を唱えるアントニー・マッケナ、アラン・ニデールのような研究者もあり、ドロップルらとの間で論争が展開された。⁵実際に『異議』の写本を精査すると、明らかに複数の手の存在を示す箇所が散見する。そもそも哲学的地下文書とは、あえて手書きの状態にとどまることで、不特定多数の読者＝筆者に開かれたいいわゆる共同執筆の現場であることを考慮するなら、『異議』にシャール以外の手が加わった可能性は当然想定すべきであろう。本稿の筆者もまた、『異議』にはシャールという主たる作者以外に複数の筆者が存在した可能性を認識し、そのようなテキストの複合性を明らかにするべく研究を行ってきた。⁶本稿ではそうした問題をふまえた上で、『異

au père Malebranche par Mr. ... , officier militaire dans la marine. Texte intégral du « Militaire philosophe », Presses universitaires de Bruxelles, 1970 ; 35-49 ; ROBINET, André, “Boulainviller auteur du *Militaire philosophe*?”, *RHLF*, (1973), pp. 22-31 ; Frédéric Deloffre and William Trapnell, « The identity of the ‘Militaire philosophe’ : further évidence », *Studies on Voltaire and the eighteenth century*, 341 (1996), p. 27-60.

⁴ Francis-L. Mars, « Avec Casanova à la poursuite du *Militaire philosophe*. Une conjecture raisonnée : Robert Challe », *Casanova Gleanings*, vol. XVII, nouvelle série 1, 1974, p. 21-30.

⁵ この間の経緯については、藤原真実「『宗教についての異議』と『軍人哲学者』」、『異議』, p. 1038以降を参照されたい。

⁶ Mami Fujiwara, « Approches numériques des questions d’auctorialité (3). Bilan et perspectives de l’enquête dans le corpus chalien ». Séminaire du programme de Challe du LABEX OBVIL, organisée et animée par Geneviève Artigas-Menant et Christophe Martin, le 17 mars 2018.

- « Quelques hypothèses sur une rédactions à plusieurs mains du 4ème Cahier des *Difficultés sur la religion proposées au Père Malebranche* », Approches numériques des questions d’auctorialité (2): à propos du 4eme Cahier des *Difficultés sur la religion* de Robert Challe. Séminaire du programme de Challe du LABEX OBVIL, organisée et animée par Geneviève Artigas-Menant et Christophe Martin, le 11 mars 2017.

議』を呈する複合的な声を「著者」と呼び、ロベール・シャルをその代表者と見做すものとする。

そのロベール・シャルは、17-18世紀にヨーロッパ精神の土台を揺るがした思想の大きな潮流を熟知していたと考えられる。彼はハーグの『文学新聞』宛ての書簡⁷のなかで、ビニョン神父の図書室で『文学新聞』を読んだと述べていることから、当時一般の知識人が利用できた個人の図書室や王立図書館（1692年から時限的に公開）に通い、古今のあらゆる傾向の図書を読み漁っていたことが想像される。まして『異議』に筆者が複数いた可能性を考えるなら、そこにあらゆる読書経験と、それにもとづく複数の意見の相互応答が見られるのは当然のことであろう。著者は、『異議』の冒頭でマルブランシュ神父に呼びかけながら、「誓って申しますが、おのずと頭に浮かんでこなかった考えなど一つもありません。私はスピノザの書など表紙さえ見たことがありませんし、その類のどんな本も、ソツツイーニ派のものも、理神論者のものも全く見ていません」と断言しているが、⁸スピノザもソツツイーニ派も本文中で何度となく言及されている以上、これを字義通りに受け取ることはできないだろう。とりわけノート2、ノート3がスピノザの『神学・政治論』との対話のなかで書かれたことは想像に難くない。

以上を考慮に入れた上で、本稿では『異議』が展開する「人造宗教」批判の背景にあった思想論争の一端に光を当てることを目指して、『異議』の著者が哲学的対話を行ったと考えられる多数の著作のなかから、カトリックの側に立つ人物たち、とりわけ『異議』との関係でこれまで取り上げられることがほとんどなかったジャック＝ベニーニュ・ボシュエとリシャル・シモンを取り上げたい。周知のとおり、17世紀フランス教会を代表する説教師ボシュエは、キリスト教の権威と伝統を擁護するため、次々と勃興する自由思想や異端と闘った。いっぽう近代聖書批評学の先駆者として知られるオラトリオ会士リシャル・シモンは、ボシュエと同じ正統カトリックを自称しながら、聖書をあくまでも一個のテキストとして文献学的に批評してその権威を揺るがしたために、ボシュエの怒りを買うことになった。

⁷ Robert Challe, *Mémoires. Correspondance complète*, éd. F. Deloffre et J. Popin, Droz, 1996, p. 458.

⁸ *Difficultés*, p. 66 ; 『異議』 p. 17.

ポール・アザールは、『ヨーロッパ精神の危機』第2部第3章および第4章で、正統的信仰をおびやかすボシュエの敵として、スピノザ、シモン、マルブランシュ、エリ・デュ・パン、ル・クレール、フェヌロン、ジュリユ、グロティウスなどに言及しているが、なかでもシモンと多数の年代学者との戦いに関して多くの頁を割いている。⁹そのような厳しい対立関係にあったボシュエとシモンについて、『異議』の直接的言及はむしろ少ない。しかし、『異議』のなかに一度だけ用いられている「神聖なる商売」という表現を一つのキーワードとしてその時代の思想的状況をたぐってゆくと、そこにボシュエ、シモンの著作と『異議』の関係が見えてくるのである。

I. 『宗教についての異議』における「神聖なる商売」« sacré commerce »

前後の文脈

『異議』のなかで「神聖なる商売」という表現が用いられるのは、『異議』を構成する4つの「ノート」の2番目においてである。そのノート2は全部で21の章と、「信仰に対する反駁」と題するきわめて長い文章（ミュンヘン草稿で163-195ページ）からなるが、「神聖なる商売」という表現は、後者のなかにあらわれる。前後の文脈を見るために、まずはノート2の概要を示しておく。このノートを構成する21の章には、第1から第21までの「真理」という見出しがあり、それぞれが掲げる命題を論理的推論により「証明する」という形式になっている。例えば「第1の真理」の冒頭には次のように書かれている。「第1の真理 これによって、誰もが宗教に関して自由であることを証明する。宗教は個人的な事柄である。」以下すべての「真理」を引用する余裕はないが、要約するなら、聖典も祭司も祭司による「演説」も神に由来しないことを「証明」し、それにより、あらゆる人造宗教¹⁰は虚偽であること、何人もそれを信奉する義務を負わないばかりか、それを信奉することは犯罪でさえあること、人は神から与えられた理性により正しい宗教を探さねばならない

⁹ ポール・アザール『ヨーロッパ精神の危機』野沢協訳、法政大学出版局、1973年、p. 221-279.

¹⁰ « religions factices » 『異議』の著者は、ローマ・カトリックをはじめとする諸宗教を、人間が作り上げたものと見做して、このように呼ぶ。

こと、各個人が自分の宗教を作ったり選んだりできることなどを主張して、キリスト教を含むあらゆる宗教の基盤を覆すというのが「21の真理」のあらましである。その後に続く「信仰に対する反駁」では、著者は自らが闘うべき最後の「怪物」、すなわち信仰の問題と対峙する。

私が闘うべき怪物はもはや一匹しか残っていません。神話のキマイラ以上に奇妙で想像を絶する怪物です。この理性存在〔頭の中にしかないもの〕は人間の狂気がでっち上げたもので、虚栄、傲慢、貪欲が厚かましくもそれを持ち出し、人の頭の上を歩くという快感がそれを支え、弱さと怠惰と愚かさがそれを受け入れ、そして今も前例や慣習がそれを持続させ、容認させています。

それは信仰というものです。この単語は何の意味もない空疎な言葉か、あるいは、全くつまらぬ問題でも最高に受け入れがたいものしか意味しない言葉です。¹¹

著者によれば、「真の宗教」すなわち「自然宗教」の神は万人に直接働きかけ、教えるのであるから、書物も代行者（ministre：神の代理人すなわち聖職者）も儀式も必要ない。しかるに「どんな人造宗教にも祭司や神祇官や博士や注釈者」がいて、「欲得の面でもおごりの面でも常に自分の利益になるように、戒律を積み重ね、儀式を積み重ね、信仰箇条を積み重ね」る。そのようにして維持される諸々の人造宗教は、著者によれば「傲りと欲得」という基礎の上に立っているので、「代行者」らが名誉も給料も得られないようにしてしまえばたちまち立ちゆかなくなる。「いかに小さいほころびからも崩れ去」ってしまうような「建て付けの悪い建物」だと言うのである。それほどに脆い組織であるからこそ、批判を容認しない。劇場で法曹家や軍人の不正や虚偽が揶揄され非難されることはあっても、聖職者の放蕩や悪徳が芝居の種にならないのはそのためだという。

司祭に特有なささいな悪徳でも、それを衆目にさらす勇氣は誰にもないでしょう。宗教の根本とは無関係なことでもそうです。司教や僧院長など、多額

¹¹ *Difficultés*, p. 239 ; 『異議』 p. 144.

の聖職録を持つ人たちの放蕩と懶惰を芝居で演じたら、連中が愛人と山盛りの野禽肉^{ジビエ}を食べて四旬節を過ごすところなどを舞台にのせたら、歩いて行っただけなのに馬で行った金額を払わせたと認めた執達吏に司祭が赦免を拒んだり、その執達吏が葬式代を払わせ、司祭様の方は四十里も離れたところにいたのに、参列費や手数料以外に臨席費まで支払寄せたのを芝居にしたら、僧族の聖なる集団全体は何と言うのでしょうか。

そんな芝居をしたら、作者も俳優も観客も破門されるでしょうし、国王もしばらく劇場全体を閉鎖しなければ安心できないでしょう。相続財産を蕩尽したり、金持ちの未亡人の家に入り込んだり、指導にかこつけて若い娘を誘惑したり、その他この神聖なる商売〔交際〕で行われるすべてのことが笑劇に仕立て上げられたら、またそこに彼らの野卑な酔態や大食ぶりが織り交ぜられたら、さらに、酒が入って思わず本音が出た時に、宗教や自分自身の修道会について何と洩らしたか披露して民衆を楽しませたら、修道士の恐るべき集団は嵐のごとく荒れ狂うに違いありません。

このように、芝居で揶揄することすら許されないという聖職者の行状をさんざんに暴く著者が、それらの行状を総集して用いるのが「神聖なる商売/交渉」という表現であり、以下に見るように、そのような聖職者らの« sacré commerce »すなわち貪婪な行状の数々を正視するのを妨げ、それらを相変わず神聖視させるために必要とされるのが、「信仰」なのである。上記の引用文の直後に、以下の文章が続く。

実のところ、「信仰だ」、「信仰だ」と彼らが叫ぶのはもっともなのです。この人たちは聖人で、浮世・俗世から解脱している、あらゆる情念から解放されて神に身を捧げ、一切の被造物を放棄していると信じなくてはいけないのです。その信仰がなくなったら彼らは破滅してしまうからです。¹²

« sacré »と« commerce »について

上に引用した箇所が示すとおり、著者による「神聖なる商売」とは、第一に、宗

¹² *Difficultés*, p. 242-244 ; 『異議』 p. 147-148.

教者らによる報酬目当ての活動全般を指す。同じ章の少し先にも、「霊的な財を商うあの商人たちは、霊的な貨幣だけで支払われていたらじきに店じまいしただろう」¹³とあることからわかるように、著者はここで人造宗教の祭司らに強欲な商人のイメージを重ねている。しかし、上の引用箇所ではcommerceという語に込められているのは、商品のやりとり、取引、商売といった意味だけではない。たしかにここでは、聖職禄、葬式代、参列費、手数料など、金銭的な利益に関する言及が多いが、同時に「愛人と山盛りの野禽肉を食べて四旬節を過ごす」といった聖職者の放蕩と懶惰も問題になっていることから、commerceという語のもう一つの意味——社会における人と人との関係、交際、付き合い、さらにその一部である「肉体関係」あるいは「異性間の非合法的な関係」(リトレ)といった語義をも考える必要があるだろう。

実際に『異議』のなかでcommerceという語は多様な意味を与えられている。たとえば著者はノート3の最後で「キリスト教には学問と技術と人間間の交渉commerceが必要だ」¹⁴と述べたあと、宗教を維持し世界中に広めるためのさまざまな人間的営み——書物を読んだり書いたりする技術、翻訳するための文法、典礼に必要なパン、ぶどう酒、衣服、香油や蠟燭などの入手、司祭に支払う報酬、宣教師の異国への派遣、公会議決定や法王が制定した法の普及等々に言及していることから、commerceということばに多様な人間間のやりとりを見ていることがわかる。要するにシャルルは当時の多くの著述家と同様、「かかわり合い、関係、交渉」といった意味でもcommerceという語を使っているのである。

リシャル・シモンは1697年に発表された『ブウール神父に呈する異議』のなかで、ブウール神父が新約聖書の翻訳でヨセフとマリアについてcommerceという語を用いたことを批判しているが、ここにもcommerceという語の多義性の問題が関係している。シモンが問題にしたのは、ブウール神父訳新約聖書(マタイ1:18)にある「男女のcommerce」という言い回しで、シモンはこれがもっぱら婚姻によらない、非合法の関係を思わせると述べてブウール神父を批判したのであ

¹³ *Difficultés*, p. 263; 『異議』 p. 164.

¹⁴ « Le christianisme a besoin de science, des arts et du commerce humain. » *Difficultés*, p. 546; 『異議』 p. 371.

る。¹⁵ それに対して『トレヴー辞典』初版（1704年）は、序文と項目« commerce »に付け加えられた長い節のなかでこれに反論した。「commerceという語それ自体は善悪とは無関係であり、それに付加される語や、その背景となることがらがそれに善または悪の性格を与える」ことを、多数の用例を引きながら証明しようとしたのである。この小さな論争は、当時commerceという語に内在していた不安定性と、多様な意味合いを許容する柔軟性に光を当てている。

いっぽう« sacré »という語について言うなら、「聖なる」「神聖不可侵の」といった意味を持つこの語は、罵りの表現のなかで名詞の前に置かれて、「sacré menteur!」「嘘つきめ!」のように、不愉快さ、いまいましさを表すことがあり、その一方で「すばらしい、けっこうな」という感嘆のニュアンスが生じることもある。ところが、『異議』が書かれた時代の辞書には、sacréという語の皮肉的・否定的な語義は見られない。リシュレの辞典（1680年）、フルティエールの辞典（1690年）、そしてアカデミー辞典の初版（1694年）から第四版（1762年）のいずれにもそのような語義は記載されていない。この語の否定的な用法がはじめて言及されるのは、1789年のアカデミー辞典で、1835年の同辞典には、「この語法はこの上なく下品で卑しい言葉遣いであり、けっして用いるべきではない」という注意書きもみられる。さらにロベールの『フランス語歴史事典』*Dictionnaire historique de la langue française*は、名詞に前置されたsacréが皮肉または感嘆のニュアンスを帯びるようになったのは18世紀半ば以降だと述べている。そのとおりだとすれば、『異議』が書かれたとされる1710-12年には、「sacré」の否定的な意味は一般化していなかったことになる。シャルの« sacré commerce »にはむしろ斬新かつ大胆な皮肉を読み取るべきなのかもしれない。

II. 「神聖なる商売」とボシュエほか17世紀後半のカトリック司祭たち

17世紀の説教における« sacré commerce »の用例

宗教に関係する文章のなかで「神聖なる商売」という表現を用いた例は、ほかに

¹⁵ Richard Simon (1638-1712), *Les Difficultés proposées au père Bouhours de la Compagnie de Jésus, sur sa traduction française des Quatre Évangélistes*, Amsterdam, 1697, p. 79.

も数多く見出される。シャール以前のカトリック司祭の説教集等では頻繁にこの表現が用いられている。たとえばディーニュのレコレ派修道院で説教師と修道院長を兼任したボナヴァンチュール・ブリュヌによる『煉獄の魂たちのために生者たちが行う交渉 commerce』（1658年）¹⁶では、「神聖なる交渉」という表現は、「煉獄にいる魂たちの解放と刑罰の軽減を交渉する」ために行われる「司祭によるパンとぶどう酒の奉納、聖人たちによる祈り、友だちによる施し、親きょうだいによる断食」を指す。要するにブリュヌは« commerce »という語を、人間が同胞に代わって神の赦しを請う「交渉」という意味で用いている。

また、パリにあったサント＝ジュヌヴィエーヴ修道院の聖堂参事会員で、晩年のパスカルの告解師を務めたことでも知られるポール・プリエの『信仰とキリスト教の永遠性』（1680年）では、« le sacré commerce »は天使と人との間の「関係」、「交渉」の意味で用いられている。プリエによれば、神が天使と人との間に「神聖なる交渉」を打ち立てたのには3つの理由がある。第1に、「善と叡智と至高の権能という3つの主要な完全性の輝きのなかに」神の栄光が現れるようにするため、第2に、天使たちの利益のため、すなわち、神に反逆した墮天使たちが世の中に開けた穴を義なる天使たちと聖人たちが埋め合わせるようにするため、そして第3に、人間がこの世の生において完全なものとなるために必要な教えと導きを与えるため、という理由である。¹⁷

『ノートル・ダム・ド・ラ・メルシ修道会史』（1685年）ではさらに具体的に、聖パウロが祈禱、法悦、天上への引き上げのなかで神との間に持ったとされる交渉を言うのに« le sacré commerce »という表現を用いている。¹⁸

オラトリオ会の説教師ジュリアン・ロリオは『我らが救い主の秘蹟をめぐる説教』のなかで、テルトゥリアヌスの『肉の復活について』第51章を引用しながら、「神

¹⁶ Bonaventure Breugne, *Le commerce des vivants, fait en faveur des âmes du Purgatoire*, Lyon, 1658, pp. 60, 102, 214.

¹⁷ Paul Beurrier (1608-1696), *La perpétuité de la foi et de la religion chrétienne, dans les trois états de la loi de nature, de la loi écrite et de la loi de grâce*, Paris, 1680, tome 1, p. 194-195.

¹⁸ Révérends Pères de la Mercy de la Congrégation de Paris, *Histoire de l'ordre sacré, royal, et militaire, de Notre-Dame de la Mercy, rédemption des captifs, dédiée au Roy*, Amiens, 1685, p. 86.

聖なる交渉」という表現を用いている。——イエス・キリストは信徒たちのからだに天の栄光を授け、彼らに対する愛のしるしとしてその状態のからだを天国に持ってゆく一方で、信徒たちが待ち望むべき復活の保証として、自らの聖霊を彼らに残していった。——ジュリアン・ロリオはこの「からだ」と「聖霊」の交換を「神聖なる交渉」と呼ぶのである。¹⁹

このようにして見てゆくと、この表現が当時のカトリック教会の司祭たちによってしばしば用いられていることがわかる。その意味するところは、天と地、神または天使と人間、聖人または聖職者の間にある関係、やりとり、交渉である。「commerce」という語の同様の用例は、以下に見るように、ジャック＝ベニーニュ・ボシュエ（1627-1704）の説教にもしばしば現れる。

ボシュエ、アウグスティヌスと「驚嘆すべき取引 (*admirabile commercium*)」

ボシュエの説教集ではcommerceという語がよく使われるが、それは往々にして受肉の奇蹟に結びつけられる。たとえば『お告げの祭日のための第一説教』では、ボシュエはまずcommerceを定義することから始める。それによれば、人間間には2種類のcommerceがある。ひとつは必要のcommerce、すなわち我々に足りないものよそから借りてくるためのcommerceであり、もうひとつは友情と好意のcommerce、つまり我々がすでに持っているものを友人たちと分かち合うためのcommerceである。先述の語義との関係でいうなら、前者は商業的な取引に、後者は社会におけるつきあい、人間関係に結びつけられる。しかし「我らが神については事情が異なる」とボシュエは言う。なぜなら神は自身で充足しており、足りないものは何ひとつないからである。にもかかわらず「[神]が人間との交渉commerceを持つのは、[...]神がみずからを我々に与えたいとねがうから」である。神はそのひとり子をこの世に送ることによりみずからを与える。そのために「神は聖処女のはらわたのなかで人性と結婚」²⁰したというのである。

¹⁹ Julien Lorient (1633-1715), *Sermons sur les mystères de notre Seigneur*, Paris, 1701, tome 2, p. 184.

²⁰ Jacques Bénigne Bossuet, *Pour la fête de l'annonciation, Œuvres complètes*, Paris, Firmin Didot Frères, 1841, t. 3, p. 196.

[...] 人間の本性に輝きを与えた恩寵の源は、イエス・キリストと我々の結びつきである。なぜというに、兄弟たちよ、この結びつきこそが、天と地の間に神聖なる交渉 (un sacré commerce) を切り開いたのであり、人類を限りなく豊かにしたのだから。神の靈感を受けた教会が、受肉を取引 (commerce) と呼ぶのは、それが理由にちがいない。嗚呼ナントイウ驚嘆スベキ取引デアロウ！たしかに——と聖アウグスティヌスは言う。——あの慈悲深き仲介者たるイエスがこの世にやって来て、我々の弱さ、悲惨、死すべき運命という、この不毛な土地が生み出す不幸な果実を我々から手に入れると同時に、天上の祖国が生み出し継承させる真の財産たる純真、平安、不死を我々にもたらすという交易をこの異邦で行うというのは、なんとも驚嘆すべき取引 (commerce) ではないか、と。まさにこの結びつきが我々を豊かに富ませるのである。この驚嘆すべき取引 (commerce) が我々の内をあらゆる財産で満たすのである。²¹

この「取引」は対等であるどころか、神にとって途方もなく不利であるからこそ「驚嘆スベキ」なのである。ここで明らかにされているように、ボシュエの説教に散見する商売・取引の比喩は、彼が最も参照したとされるアウグスティヌス²²が受肉の奇蹟の解釈のなかで展開する象徴的イメージ「商人としてのキリスト」« Christus mercator »から着想を得ている。以下は聖アウグスティヌスの『説教』233、第2章「イエス・キリストはこの世で真の救いを見出さなかった。彼は死を減ぼすために死すべき者として生まれた」、および『詩編講解』（3世紀末）からの引用である。

自らが救いであるかたが地上にやってきて、我らを支配する死をそこに見出した。我らが救い主イエス・キリストが我らの世にきて受肉したとき、我らが住む地域のなかにその救い²³を見つけたといえるだろうか。あの聖なる商人は

²¹ Bossuet, *Sur la nativité de la sainte vierge, Œuvres complètes*, éd. cit., t. 3, p. 169.

²² ボール・アザール『ヨーロッパ精神の危機』、野沢協訳、法政大学出版局、1973、p. 249-250.

²³ アウグスティヌスの直前の説明によれば、「この救い」「真の救い」とは、この世では見出されない、天使らが共有する救いである。不死、すなわち永遠の命と解釈できるだろう。

彼の王国から我らの地に途方もなく貴重な財産をもたらし、我らが住むこの地方で豊かに産出されるものを見つけた。そこに豊富にあるものとは何か？生と死、それが地上を埋めつくす産物である。²⁴

〔イエス・キリスト〕は奴隷の姿をとってくださり、そうすることで我らに彼を纏わせてくださった。こうして我らを彼のうちに変貌させるために我らを纏うことをいとわなかったかたは、我らが彼のことばを話せるように、我らのことばを話すことをいとわなかった。[...] 天の商人によってこの崇高なる取引はなし遂げられ、この交易はこの世界で公然と行われた。彼はやってきて侮辱を受け、我らにはあふれるほどの栄誉を与える。彼はやってきていやというほど苦しみを受け、我らには救いを与えた。彼はやってきて死を受け、我らには命を与えた。²⁵

マルセル・ヌシュは論考「キリスト——いとも奇妙な商人」のなかで、アウグスティヌスの商売のメタファーの起源について、キリスト＝商人という喩えは、遠方からヒッポにやって来て交易を行う商人たちの様子から着想を得たのではないかと述べている。たしかに当時の読者や説教の聞き手にとっては、商人の比喩は親しみやすく理解しやすかったに違いない。次節で見るように、さらに時代をさかのぼる福音書の世界にも同じことが言える。

「ワガ歸ルマデ商賣セヨ」

「神聖なる商売」という表現をめぐる考察は、ロベール・シャールから17世紀後半の説教師たちへ、さらに初期キリスト教の時代へと我々をいざなってきたが、さらに新約聖書にも典拠を求めることができる。聖書には商人がたびたび登場し、商売や貨幣が喩え話に用いられるからである。ここで再びボシユエをとおしてそのことを考えてみたい。

聖カタリナが授かっていたとされる知識を主題とする「聖カタリナ頌徳説教」

²⁴ Saint Augustin, *Sermon CCXXXIII*, chapitre III, *Œuvres complètes*, traduites en français et annotées par Péronne et al., Paris, L. Vivès, 1869-1878, t. 18, p. 209.

²⁵ Saint Augustin, *Discours sur les Psaumes*, *Œuvres complètes*, éd. cit., tome II, p. 837.

(1660年)において、ボシュエは知識の功罪を論じ、聖ベルナルドゥスを引用して知識が人を陥れる三つの悪徳——よからぬ好奇心、虚栄心、貪欲——を非難する。目的もなくただ知りたいから知る者、博識を得て有名になろうとする者、金儲けのために知識を得る者、「それら三者のいずれも知識を減ぼし、知識によって減ぼされる」と断じて、次のように述べる。

これほどに崇高な宝 [= 知識] はそのような恥ずべき取引 (traffic) のために作られてはいないこと、かりにそれが交渉 (commerce) のうちに入るとすれば、それはより高尚な仕方、より崇高な目的のため、すなわち、人々の魂の救済を交渉するためであることを真剣に考えなさい。²⁶

聖カタリナは、まさに高尚な目的のために——「人々の魂の救済を交渉するために」、そして「人々の魂をイエス・キリストの側に引き入れるために」²⁷その知識と才能を用いたとされる。こうしてボシュエは聖カタリナを称賛し、強欲な聖職者を批判するのであるが、そこでも商売、そして金勘定の比喩が多用されていることに注意したい。それらの司祭たちは「異質な混ぜ物である神の貨幣を贋造する欲得ずくの職人たち」に、そして「神の賜物を金で手に入れ」²⁸ようとした魔術師シモンになぞらえられるのである。²⁹

ボシュエはさらにルカによる福音書第19章13節の次のことばを引用する。

私が帰ってくるまで商売をしていなさい。

「ある立派な家柄の人」が10人の僕それぞれに10ムナの金を渡しながら言ったという言葉である。³⁰ボシュエはこの「ムナの喩え話」を用いて次のように説き聞かせる。

²⁶ Bossuet, *Panegyrique de Sainte Catherine*, *Œuvres*, éd. cit., t. 3, p. 525-526.

²⁷ *Ibid.*, p. 526.

²⁸ 使徒言行録第8章20節.

²⁹ Bossuet, *Panegyrique de Sainte Catherine*, éd. cit., p. 532-533.

³⁰ マタイによる福音書第25章14節以下にも同様の物語があるが、この台詞は書かれていない。

キリスト教の知識はイエス・キリストが我々聖職者に預けた財産であり、我々のものではない。我々はそれを借りているのであり、いつかそれについて報告をしなければならない。「商売をなさい。私がおまえにそれを許可しよう。だが忘れるな、おまえが私の財産をどのように管理し、どのように使ったのか、私は報告を求めにやって来るということを。」³¹

ボシュエはまた別の場所³²で、聖職者の知識は魂の救済を交渉するために授けられていると述べて、そのようなキリスト教教会の営みを« *négoce céleste* »（天上的取引）と呼んでいる。聖カタリナはまさにそのような営みに生涯を捧げた聖人として讃えられるのである。

このようにボシュエは商売の比喩を多用して受肉の奇蹟を語り、神と人との間で聖職者が何をするべきか、そして神から預かったキリスト教の知識をどのように用いるべきかを説くのである。

「信仰」

ところでボシュエは、同じく『聖カタリナ頌徳説教』のなかで、受肉の奇蹟、キリスト者の生活、あるいは聖職者の知識についてみずからが述べることのすべては、一つの源から流れ出ていると言う。

この源、聖人たちの知識の第一原理とは、信仰であり、我々にとって今日その性質を理解することは、その用いかたやそれに依拠するあらゆる知識の用いかたを知るために重要です。

そのことについて我々が気づくのは、聖書のなかでは、キリスト者の生活全体は、霊的な建築物として示されており、同じ聖書が、信仰はその土台であると言っているということです。聖ペテロが教会の土台として福音書に登場するのは、イエス＝キリストを認めることにより彼が最初の礎石を置き、信仰の基

³¹ Bossuet, *Panegyrique de Sainte Catherine*, éd. cit., p. 533.

³² Bossuet, *Panegyrique de Sainte Catherine*, éd. cit., p. 533-534, note marginale. 同じ「聖カタリナ頌徳説教」をほかの機会に用いるため、後から付け加えられた部分とされている。

礎を打ち立てたからにはかなりません。使徒パウロはコロサイ人たちに「我々は信仰という基礎の上に立っています。信仰の堅さが我々を福音の希望のうちに不動で揺るぎない者とする」³³と言います。同じく聖パウロは信仰を「望むべきことどものよりどころであり基礎である」³⁴と定義します。だからこそトリエント公会議は、この教理を模範としてそれに倣いながら、信仰を次のように言い表したのです。「人間の救済の始まり、キリスト教のあらゆる義の根にして基礎」。³⁵

ボシュエはこのように公会議決定³⁶に言及してキリスト教の基礎たる「信仰」の教義を確認したうえで、「信仰」はキリスト者の生活全体である霊的建築物の土台、基礎であり「始まり」に過ぎないのであるから、各人がキリスト者として建物を完成させねばならないと説くのである。³⁷

ここであらためて『異議』の「信仰に対する反駁」をふりかえるなら、著者は「神聖なる商売／交渉」の例を列挙し、商売と建物のイメージをことさらに用いることにより、キリスト教信仰の教義を根こそぎにしているのがわかる。すでに見たように、シャルルによれば、キリスト教の基礎にあるのは信仰ならぬ「傲りと欲得」にすぎず、信仰とはそのような現実を目をつぶること、「傲りと欲得」の上に立てられた「建て付けの悪い建物」すなわち「不正の集積」を崩壊から守るための煙幕にすぎない。

II. 「恥ずべき商売」

『異議』と偽聖遺物

上で見たように、『異議』の筆者が« sacré commerce »と言うとき、その背景に

³³ コロサイ人への手紙1：23.

³⁴ ヘブライ人への手紙11：1.

³⁵ Bossuet, *Panegyrique de Sainte Catherine*, éd. cit., p. 527.

³⁶ トリエント公会議第3会期.

³⁷ Bossuet, *Panegyrique de Sainte Catherine*, éd. cit., p. 527-529.

は、ボシュエをはじめとするキリスト教の擁護者たちによる信仰論に対する揶揄と、それをもってキリスト教の土台を突き崩そうとする意図があったと考えられる。しかし同時に、「神聖なる商売」と聞いて思い浮かべるのは、聖遺物売買ではないだろうか。ロベール・シャールの『異議』においても聖遺物売買は重要なテーマの一つである。『異議』の第4ノートを除くすべてのノートにおいて、著者は「ああいう不敬な捏造品の商売」を繰り返し告発している。この点でシャールは、『聖遺物論』(1543年)で聖遺物崇敬を批判し、それがもたらす迷信を否定したカルヴァン³⁸と同じ立場に立つ。カルヴァンは『聖遺物論』の冒頭でアウグスティヌス³⁹に言及して、この悪習がはるか昔から続いていると指摘している。その一方で、『聖遺物論』の直後に招集されたトリエント公会議では、依然として聖遺物の有効性が認められ、その決定はロベール・シャールの時代にも影響力を持ち続けていた。『異議』はそうした公会議に集まる神父たちを、「宗教を小作地くらいにしか見ていない」、「無知で怠け者で享楽家で卑怯で貪欲な馬鹿者」と言い放ち、⁴⁰そのような司祭たちの「貪欲と損得と傲慢と野心と政略と卑劣さと、時には頑迷さや党派心を原理」とする公会議の決定から、「はじめの数世紀には考えもしなかった」「怪物ども」すなわち「イエス・キリストの神性、実体変化、司祭職の性格、赦免、贖宥、聖像や聖遺物の崇敬、聖人のとりなし、婚姻の秘蹟性」が生じたのだと断じる。⁴¹

『異議』のノート1は、著者がそのような考えに至った経緯を、哲学的地下文書にはめずらしい、伝記的な叙述をおりまぜながら説明する。それによれば、当時の一般的フランス人同様、カトリック信仰のなかで育った著者は、少年時代はきわめて信心深く、「悪魔、幽霊、妖術師を極度に恐れていたので、体中を十字の印で覆」⁴²うほどであった。しかし、ローマ法王庁の横暴や聖職者の腐敗を聞いたり読んだりするうちに疑問を抱き、宗教を検討したいと思うようになる。著者の宗教観

³⁸ Jean Calvin, *Traité des reliques*, Genève, 1543.

³⁹ アウグスティヌスは『修道士の労働について』(400年)においていかがわしい聖遺物売買を嘆いている。さらに、438年に発布されたテオドシウス法典は聖遺物売買を禁じる文言を含んでいる。(CTh.9.17.7)

⁴⁰ 『異議』ノート3, 第7部, 第2項「公会議について」, p. 323. *Difficultés*, p. 479.

⁴¹ *Ibid.*

⁴² 『異議』p. 27; *Difficultés*, p. 85.

は、身近な出来事とおしても変えられていった。たとえば剃髪をしてくれた司教の小斎日の食卓の豪華さに衝撃を受けたことや、幼少期のシャルが母親に連れられていったソミュール・アルディリエのノートル・ダム教会⁴³で、霊験あらたかとされるマリア像を見て幻滅したときのことなどを著者は生々しく語っている。そのような体験の積み重ねから自然に生じた疑問の一つが聖遺物に関するものであった。

聖遺物の崇敬も考察しましたが、それが自分のものと同じような四肢であると想像していた私は、通常それが腐った骨にすぎないことを悟りました。無尽蔵なローマの倉庫から取り寄せたああいう骸骨が殉教者の体であるという確証がどこにあるのでしょうか。⁴⁴

こうして『異議』の著者は、ほかのあらゆる偶像崇拜とともに聖遺物崇敬を否定し、偽聖遺物の取引を糾弾する。「腐った骨」という表現は『異議』の全体にわたり5回も使われていることから、この問題に対する著者の思いの強さと執拗さが理解されるのである。

ジャン＝バティスト・ティエールと偽聖遺物

宗教改革の時代から『異議』が書かれた時代にかけて、聖遺物に関連してフランス語で書かれた本のほとんどは、聖遺物の発見、奉納、移転などに関する報告、聖人や聖遺物にかかる伝承、教会や修道院が所有する聖遺物や宝物の紹介やその目録を内容とする、聖遺物崇敬の信奉者や奨励者の側で作成されたものであった。⁴⁵いっ

⁴³ 現在もソミュール近郊にあるノートル・ダム・デ・ザルティリエ教会。15世紀に農夫によって不思議な聖母像が発見され、以来、巡礼の要所となる。16世紀に聖堂が作られ、17世紀に現在の教会が建立された。シャルの幼年期にあたる17世紀後期は特に巡礼が盛んに行われていた。

⁴⁴ 『異議』 p. 24 ; *Difficultés*, p. 79.

⁴⁵ フランス国立図書館の総カタログで1500年から1710年までの間にフランスで発行された *relique* という語をタイトルに含む書籍を検索して得られる97点の著作のタイトルを概観した結果である。

ぼうリシャール・シモンの『批評叢書』⁴⁶を繙くと、『異議』より数年前に、カトリック教会の「恥ずべき商売」を告発するいくつかの書が書かれていることがわかる。なかでもよく知られているのがジャン＝バティスト・ティエールの『ヴァンドームの聖涙についての論考』⁴⁷（1699年）である。聖遺物崇敬の裏にひそむ偽聖遺物の取引や迷信に光を当てるこの書を、リシャール・シモンは以下のように紹介する。

国王允許付きで1699年にパリで印刷されたティエール氏のこの論考は一読に値する。修道士たちの卑小で欲深い慣行を明らかにしているからだ。ティエール氏によれば、修道士、とりわけベネディクト会士らは、彼らの偽聖遺物を支えるために、恥ずべき商売（commerce honteux）をしている。ル・マン司教猊下への書簡体献辞のなかで、氏は公然と次のように述べている。「ベネディクト会士たちは彼らの教会内に大量の偽聖遺物を保管しており、聖人の祝日に際して展覧を行うが、そうすることで、民衆のあまりの信じやすさを悪用することにならないだろうか、と心配することもない。」⁴⁸

著者のジャン＝バティスト・ティエール（1636-1703）は、シャルトル司教区シャンプロンの主任司祭を務めた後、ル・マンの小村ヴィブレの主任司祭となった神学者で、ラテン語による神学書のほか、フランス語の著書を次々と発表し、教会における富の濫用や聖職者の吝嗇を戒め、迷信や修道院の非人間的な慣習などを告発した。『異議』にはその名前は現れないが、ドロース版の註に指摘されるように、明

⁴⁶ Richard Simon, *Bibliothèque critique ou Recueil de diverses pièces critiques dont la plupart ne sont point imprimées, ou ne se trouvent que très difficilement*. Amsterdam, Jean Louis de Lormes, 1708-1710, 4 vol. フルタイトルは『批評叢書、または、その大半が未完か稀覯本である批評的作品の寄せ集め』。本書においてシモンはほかの作家の著作を紹介するだけでなく、第三者を装って自らの著作を紹介したり、自らへの攻撃に対して反論したりした。例えば第2巻第31章では、「シモン氏」に代わって『トレヴー新聞』の記事に反論し、仇敵ニコラ・トワナルへの恨み辛みを書きたてている。

⁴⁷ Jean-Baptiste Thiers, *Dissertation sur la Sainte Larme de Vendôme*, Paris : Vve C. Thiboust, 1699.

⁴⁸ *Ibid.*, t. III, p. 337. 下線部筆者。

らかにティエールの大作『迷信論』⁴⁹への言及と受け取れる箇所がある。

私は或る村で、ましな本がなかったため、ルイ・ゴフルディ〔ママ〕の裁判記録を読みました。当の祓魔師のひとりが書いて、法王からも各神学大学からも修道院長からも承認を受け、允許付きで印刷されたものです。悪魔祓いのペテンのすべてと妖術や悪魔憑きの欺瞞を暴露するためには、この本しか要りません。⁵⁰

『異議』の重要な検討対象である迷信の問題を探究するために「この本」がそれほど役に立ったのであれば、シャルルはティエールのほかの著作をも参照したことが当然想像される。そして、そのひとつとして考えられるのが、1699年に刊行されたティエールの『アミアン司教証聖者フィルマン3世の亡骸の在処についての論考』⁵¹である。『異議』はまさにこの聖人の聖骨をめぐる事件にふれて、「聖人の亡骸があるとされていた墓が空だとわかった時、アミアンの教会参事会員たちはその墓から去ったでしょうか。私たちの間違いでしたと言ったでしょうか。架空の遺骸に奉納

⁴⁹ Jean-Baptiste Thiers, *Traité des superstitions qui regardent les sacrements selon l'Écriture sainte, les décrets des conciles, et les sentiments des Saints pères, et des théologiens*, Paris, Antoine Dezallier, 4 vol. 1697-1704.

⁵⁰ 『異議』 p. 294 ; *Difficultés*, p. 440-441.

⁵¹ Jean-Baptiste Thiers, *Dissertation sur le lieu où repose le corps de S. Firmin le confès III. Évêque d'Amiens*, Paris, 1699. リエージュで発行された本書第2版(1699)の「前書き」によれば、アミアン教会が崇敬する聖フィルマンは2人いる。ひとりとは殉教者フィルマンと呼ばれるアミアンの初代司教で、もうひとりとはアミアンの3人目の司教である証聖者フィルマンである。後者の亡骸は13世紀にアミアン大聖堂に移され、以来、聖遺物匣の中にあると信じられていたが、1696年11月にその匣が開けられたところ、何も入っていなかった。その後、1697年1月に、サン・タシユル教会(アミアンのサン・タシユル地区、聖フィルマンの墓の上に300年頃に建立された教会)で5つの古い墓が発見され、Firminusと彫られた石の下から人骨が見つかった。そのため、偏見なしに判断する人々は、証聖者フィルマンの亡骸は大聖堂ではなくサン・タシユル教会にあったと信じたが、そう考えないアミアンの教会参事会員とサン・タシユルの教会参事会員との間に論争が起こった。

されたものを返したでしょうか。毎日奉納されるものを辞退するでしょうか⁵²と述べているが、ティエールの論文にはその事件の顛末が詳しく記されているのである。

リシャル・シモンと偽聖遺物

シャルと同時代を生き、偽聖遺物問題を告発したカトリック司祭として、ジャン＝バティスト・ティエールと同様に重要なのが、新・旧約聖書の初の本格的なテキスト批評で知られるリシャル・シモンである。ティエールの論文に関する同じ記事のなかで、シモンは次のように述べている。

しかしこの批評家がベネディクト会士の偽聖遺物や、とりわけヴァンドームの聖涙をいくら非難しても無駄である。ベネディクト会士らは、彼らの古文書の権威を盾に反論してくるだろう。それは彼らにとって預言と同じ価値を持つのだ。[...]

要するに、僧院の財産を守ろうとするあの修道士たちの行動は、批評のルールからも、単なる論理のルールからも外れている。そうでなかったら、連中は財産の大部分を返還せざるを得なくなるだろう。[...] ティエール氏がヴァンドームの聖涙をいくら非難しても、ベネディクト会士らがそこから引き出す利益を恥ずべき儲けだといくらいっても無駄である。単純な民衆は相変わらずそれを聖涙と呼び続けるだろうし、そうした大衆的な誤りに陥っている彼らは、ヴィブレの司祭のことを、聖人崇敬や聖遺物崇敬をけなすプロテスタントだと思っだろう。⁵³

ティエールと同じ立場に立つシモンは、不正を行う宗教者たちに普通一般の理屈がまったく通用しないこと、それほどに頑迷なのは、ひとえに欲得のせいであることを強調した上で、ベネディクト会士らは自分たちの誤りをわずかでも認めたが最後、財産の大部分を手放さざるを得なくなると予告する。これと同じ論理展開は、

⁵² 『異議』（ノート2「第5の真理」）、p. 65 ; *Difficultés*, p. 138.

⁵³ Richard Simon, *Bibliothèque critique*, op.cit., t. III, p. 338-340.

『異議』においても、アミアンの聖遺物論争に関する箇所に見られる。すでに一部を引用した箇所であるが、ティエール、シモンとの関連性が見出されるので、少し長く引用する。

あらゆる宗教の聖職者たちは、先入観に加えて、およそ人間を動かせるかぎりの強い欲得から宗教を支えます。宗教の土台が覆され、民衆が目覚めてしまえば、彼らは富と名誉の頂点から、せっかく這い出してきた泥沼へ、少なくとも生まれつきの身分へ、つまり今の身分よりはるか下まで転がり落ちてしまうのです。彼らがそのような転落に甘んじるでしょうか。むしろ永遠に白を黒だと主張し続けるでしょう。聖人の亡骸があるとされていた墓が空だとわかった時、アミアンの教会参事会員たちはその墓から去ったでしょうか。私たちの間違いでしたと言ったでしょうか。架空の遺骸に奉納されたものを返したでしょうか。毎日奉納されるものを辞退するでしょうか。⁵⁴

『教会の収入源とその収入拡大の歴史』

リシャール・シモンの『批評叢書』は、ローマ・カトリック教会の「恥ずべき商売」に関するもう一つの重要な著作を紹介している。そのタイトルは、『教会の収入源と収入拡大の歴史。教会録に関係する諸事項、空位聖職禄の収益取得権、司教叙任権、諸々の任命権、君主に付与されたその他の諸権利が論じられる。コスタのジェローム〔ヒエロニムス〕著』⁵⁵ (1684年)である。タイトルが明示するように、本書はキリスト教会が初期教会以来の歴史のなかで財政システムを確立していった経緯を明らかにするものである。第1部のはじめで最初期のキリスト教徒の簡素な財産共同体と宗教的実践のありようを示し、その上で各時代、各地域（フランスを

⁵⁴ 『異議』 p. 65 ; *Difficultés*, p. 139.

⁵⁵ Richard Simon, *Histoire de l'origine & du progrès des revenus ecclésiastiques, où il est traité selon l'ancien & le nouveau droit de tout ce qui regarde les matières bénéficiales, de la régle, des investitures, des nominations & des autres droits attribués aux princes*, par Jérôme à Costa, Francfort, 1684. 1684年の初版の後も次々に増補され、1706年の第4版は2巻本でバーゼルで刊行された。

中心とするヨーロッパ)のキリスト教会の経済体制と統治構造を歴史的に論じている。著者名は「コスタのジェローム〔ヒエロニムス〕」とあるが、これがリシャール・シモンの偽名であることは言うまでもない。ポール・アザールによれば、シモンはこのほか「パリ大学神学部の匿名神学者、ガリカン教会司祭ルネ・ド・リール、ジェローム・ル・カミュ、ジェローム・ド・サント＝フォワ、牧師ピエール・アンブラン、オリゲネス・アダマンティウス、アンブロシウス、ジェローム・アコスタ、モニ殿、シモンヴィル殿、その他」多数の偽名を使用した。⁵⁶あくまでもカトリック司祭の立場を堅持しながら、カトリックやプロテスタントを相手に論争を繰り返し、そのたびに名前を変えたのである。『教会の収入源と収入拡大の歴史』の初版はフランクフルトで1684年に発行された後、版を重ね、1706年に増刷されて2巻本になった。その際の序文には、すでに8版を数えると書かれているから、当時のヨーロッパでかなり読まれていたことがわかる。

本書の執筆において、シモンが参照した最も重要な資料の一つが、修道院や教会に保存されているcartulaireと呼ばれる台帳である。シモンはこれを友人を通して借り出したり、王立図書館で閲覧するなどした。⁵⁷cartulaireとは、修道院や教会の売買契約、交換契約、特典許可証、免役、免属その他の証書を含む一種の土地台帳である。シモンは証書の原本と台帳に記載された写しを比較したり、古い台帳と新しい台帳を比較したりして、証書の捏造や改竄を確認した結果、多数の台帳について、編纂者の誠実さを疑わざるを得ないという結論に至っている。⁵⁸このように丹念な読解と厳正な比較検討の方法により、シモンはカトリック教会、とりわけベネディクト会の財政システムのからくりを明るみに出し、諸々の特権がどのような歴史的経緯のなかで作られ、濫用されてきたかを示した。強調すべきは、シモンが『教会の収入源と収入拡大の歴史』の冒頭で初期キリスト教徒の宗教的実践の簡素さを強調することにより、その後にローマカトリック教会がキリスト教に加えて

⁵⁶ ポール・アザール前掲書, p. 235, 243-245, notes 25-35.

⁵⁷ Jean Steinmann, *Richard Simon et les origines de l'exégèse biblique*, Desclée de Brouwer, 1960, p. 165.

⁵⁸ Richard Simon, *Histoire de l'origine & du progrès des revenus ecclésiastiques*, éd. cit., p. 338-339.

いった無数の「人為的な (factice)」部分を、いわば教義と組織の両面から対比的にあぶり出したことである。それは「聖職者による王政」を支える無数の宗教的実践の「人工性」を示すことにつながった。したがって本書は、偽聖遺物の取引、年金、特別許可、叙任、十分の一税等を論じる『異議』の著者にとって、この上なく豊かで確かな資料となったと考えられる。『異議』のなかでリシャール・シモンの名が言及されるのは以下の一度きりであるが、著者がシモンの歴史批評に大きな信頼を置いていたことは、この一節から明らかである。

神父様、このように私たちの宗教は、堅固な推論と諸々の証拠への反論によって、もっとうまく言えばその主張が無であることの論証によって壊滅したように思われます。古代エジプト人、ペルシア人、バビロニア人、ペリシテ人、アモリ人、その他当時の諸民族やイエス・キリストの時代のユダヤ人の歴史が存在したら、私たちの宗教は事実によっても壊滅するでしょう。私が確信以上の確信を持つのは、スカリゲル、ペトー、シモン、シュヴローその他のような学識もあり本もよく読んでいる人たちがこの方面の仕事をしたら、中国人あるいはヒューロン人だったら、私たちの宗教を覆す材料をもっと見つかるだろうということです。⁵⁹

先入観や偏見に左右されることなしに、理性と学識の力で宗教を検討することで、「宗教を覆す材料をもっと見つかる」であろう人びとのひとりとしてシモンが数えられている。実際にシモンは、ティエール司祭とともに、「神聖なる商売」の裏面に光を当てることで、『異議』にまたとない材料を豊富に提供したのである。

『旧約聖書の批判的歴史』⁶⁰

ここでsacré commerceという表現をいったん離れて、リシャール・シモンの仕事にもう少しふれておきたい。

⁵⁹ *Difficultés*, p. 550-551 ; 『異議』 p. 376.

⁶⁰ 本書について日本語で書かれた論考としては、以下2点を参照した。伊藤玄吾「リシャール・シモンとボシュエ(1)『旧約聖書の批判的歴史』の発禁処分に至るまで」『言語文化』

『異議』の著者が参照したと考えられるシモンの著作として、『収入の歴史』以上に重要なのは、1678年にパリで印刷された代表作『旧約聖書の批評的歴史』⁶¹である。その第1巻はモーセから現代にいたる聖書のヘブライ語テキスト、第2巻は聖書の主要な翻訳版、第3巻は聖書の翻訳法、初期教父時代から同時代までの聖書釈義の規則や方法の批評と評価にあてられている。また付録として、聖書の主要な翻訳版の目録とそれらについての考察、『旧約聖書の批評的歴史』で言及されたユダヤ人作家やその他無名の作家の目録、さらに総索引を完備している。⁶²序文によれば、この書を執筆するにあたり、著者はそれまでに書かれたほとんどすべての聖書釈義を読み、東方から多数の写本を取り寄せ、あらゆる種類の聖書の翻訳を読み、友人を介して多数の学者に意見を求め、ユダヤ教、カトリック、プロテスタントなどの文献を分け隔てなく参照し、それらの良否を吟味し、取り入れるべきところは取り入れた。⁶³ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語、アラビア語等の古典語を熟知したシモンだからこそできる仕事であった。そのような作業により、シモンは、初期キリスト教が伝承され、記され、それがまた異なる言語に訳され伝承される過程で加えられていったものを一枚一枚剥がしてゆき、すでに定着した解釈の誤りを示し、ヘブライ語の本文がいかにかに不明瞭であるかを示した。たとえば創世記の最初の節に関して、無からの創造という解釈は70人訳聖書（ギリシア語）からウルガタ聖

14-4, 2012, p. 313-351. 手島勲矢『ユダヤの聖書解釈 スピノザと歴史批判の転回』岩波書店, 2009. 伊藤玄吾氏の論文は、シモンとボシュエの対立の約25年にわたる対立の過程を4つの時期に分けて論じる予定の最初の論考となっている。その第1章では、背景にあった問題を(1)狭義の聖書研究(2)歴史批評(3)神学問題の3つの論点から明快かつ詳細に解説している。手島勲矢氏の著書は、ユダヤの伝統的な聖書解釈から歴史的・批判的解釈への転回をユダヤ学の専門家の観点から歴史的に論じるもので、シモンの聖書批評をユダヤの聖書解釈との関係で、また特にスピノザの議論との関係において評価しており、きわめて示唆的である。

⁶¹ *Histoire critique du vieux Testament*, Paris, Vve Billaine, 1678. (初版は完成前に押収されたため、本稿が参照したガリカの初版にはタイトルページがなく、手書きでタイトルが記されている。また、序文にページの記載がない。3巻を1冊に合本、巻頭および巻末の目次と序文を除く本文680頁を含む。)

⁶² 伊藤玄吾氏の前掲論文には、附録として、『旧約聖書の批判的歴史』目次全部の日本語訳が付されている。

⁶³ *Histoire critique du vieux Testament*, « Préface » éd. cit., (non paginée).

書（ラテン語）へと翻訳される過程で混入した古い伝承が作り出したものだと指摘する。「聖書の本文とそういう古い伝承を切り離すならば、われわれがそう信じるように世界が創造されたという説を有利にするものは何ひとつ結論できない。」⁶⁴シモンが本格的な本文批評のパイオニアのひとりと言われるのは、宗教者としてではなく文献学者として、伝承よりもテキストを、神学よりも批評を優先させるこうした姿勢による。

同書の成果としてよく知られるのは、モーセ五書をはじめとする旧約の諸書が複数の書き手によって加筆され改変されていることを明らかにしたことである。作者をめぐるこの種の問題は、バルーフ・スピノザの『神学・政治論』に指摘されているように、12世紀のラビ、イブン・エズラによってすでに示唆されていた⁶⁵が、キリスト教の根幹を揺るがす問題であるだけに、長いあいだ表面化しなかった。シモンとはほぼ同世代で、同様にヘブライ語に精通していたスピノザは、『神学・政治論』（1670）においてイブン・エズラの聖書解釈を論じ、徹底的な歴史批評の方法論をもって旧約聖書を分析することによりモーセ五書、ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記、列王記の従来の作者説を否定し、旧約聖書を「欠陥のある、損なわれた、改竄された、矛盾だらけのもの」とし、人は「その断片をしか保有せず、神がユダヤ人たちと結んだ契約の証書は失われた」と主張した。⁶⁶シモンも同様にヘブライ語の学識と歴史批評の方法論をもって旧約聖書が複数の書き手によって加筆されたことを指摘したが、そこからスピノザとは異なる帰結を引き出している。スピノザは聖書の文章に人為を見るが、シモンは、少なくとも表向きには、あくまでも聖書の神聖性を主張し、モーセ作者説を完全に否定することはなかったのである。そしてシモンはスピノザが「〔聖書に加えられた〕改変をあたかも純粋に人間によるものであるかのように」考え、旧約聖書の神聖性や権威を「こき下ろし」たことを次のように批判する。

〔聖書に加えられた〕改変は、あとでそこに何かが付け加えられたことを示し

⁶⁴ *Ibid.*, p. 450.

⁶⁵ *Cf. Ibid.*, p. 53-55; スピノザ『神学・政治論』畠中尚志訳、岩波文庫、下巻、p. 9 以下。

⁶⁶ スピノザ前掲書、第12章、下巻、p. 96.

ているだけであり、そのことはモーセの時代に書き記された古い契約の権威をいささかも損なわない。その点においてスピノザは自らの無知あるいは悪意をさらしてしまった。それらの改変をした人びとの資質についてよく考えもせず、モーセ五書に見出されるいくらかの変更や加筆を理由にその権威をこき下ろそうとしたのだ。⁶⁷

スピノザにしても、聖書はテキストとしては損なわれてしまったが、「意味においては」損なわれずに伝わっていると述べてはいる。⁶⁸だがシモンは、聖書に加筆をした人びともも神聖な価値を認め、聖書本文の権威を認めており、その点でスピノザとは異なる姿勢を強調する。

なぜなら、それらの追加や変更の張本人たちは、神の霊によって導かれた正真正銘の預言者たちだったからである。それゆえに、かれらが古い記録の中に挿入し得たそれらの変更は、聖書本文のそれ以外の箇所と同じ権威を持つのである。⁶⁹

シモンによれば、「公的な書記〔律法学者〕*scribes publics*」とされるそれらの預言者たちは、ヘブライ人の国家の古文書館に保存された記録を集成することも、それらの記録に適当と判断されるものを付け加えたり減じたりすることによりそれらの記録に新たな形を与えることも、自由にできた。聖書の各書がこれらの預言者たちによって書かれたのは確かなのだから、「聖書の各書の作者が誰だったのかとあまり詮索しすぎるのは無駄なこと」⁷⁰だという。要するにシモンは、聖書の各部分に手を加えた人びとを個々人としてではなく、預言者の集団と見做していたといえる。そのような考え方のなかに、私たちは奇しくも哲学的地下文書を想起させるような作品と作者のありよう——動き続ける一つの書物とそれを作り続ける集団としての作者——をみることができる。エルネスト・ルナンはそのことを次のように端

⁶⁷ *Histoire critique du vieux Testament*, éd. cit., « Préface » (non paginée).

⁶⁸ スピノザ前掲書、第12章、下巻、p. 110.

⁶⁹ *Histoire critique du vieux Testament*, éd. cit., « Préface » (non paginée).

⁷⁰ *Ibid.*

的に表している。

テキストが加筆され、相次いで編纂されたという考え方が、真正さをめぐる旧式の議論に取って代わった。こうした見方においては、テキストはもはや、正典と見做すか外典と見做すか、認めるか丸ごと棄てるかするべきような、何かしら固定的なものではない。いくつかの法則にしたがって増殖したり、ときには変貌したりしつつも、それ自身であることをやめない、一つの有機体なのだ。⁷¹

そしてそのような有機体が、神に直接由来する真理を伝えているというのが、シモンがその著作において示した考え方である。

聖書に含まれる諸々の真理が不謬であり、神の権威によるものであることは疑い得ない。それらは直接神に由来するからであり、そのことにおいて神は人間を代弁者として用いたにすぎない。だから、ユダヤ教徒であれキリスト教徒であれ、聖書が神の純粋なことばであると同時に宗教の第一原理であり土台であることを認めない者はひとりもない。しかし、それら真正なる書物やそれ以外のあらゆる書物は人間に託され、原本は失われてしまったので、長い時間を経たことや、写字生の不注意のせいで、そのなかに数多くの変化が生じないことはいわば不可能であった。⁷²

留意すべきは、ここでシモンは聖書それ自体の無謬性や神聖性を肯定しているとは言いきれないこと、聖書が直接神に由来するとは述べていないことである。不謬かつ神の権威をもつのは聖書に含まれるいくつかの真理であり、それらの真理が神に直接由来すると述べているのである。また、聖書が「純粋な神のことばla pure parole de Dieu」だということも、自分の意見としてではなく、一般論としてそう信じられていることを述べているにすぎず、同時にそれが人間の手によって改変さ

⁷¹ Ernest Renan, « L'Exégèse biblique et l'esprit français », *Revue des deux Mondes*, XL (1865), p. 240.

⁷² Richard Simon, *Histoire critique du Vieux Testament*, éd. cit., p. 1.

れたことを指摘するところに、シモンの慎重な姿勢を読み取ることができる。さらに、スピノザに反論したり、聖書の真理の神聖性と権威を主張したりする上記の引用箇所は序文と第1巻の冒頭にあることを考えるなら、それらはカトリック教会の断罪をかわすための防御策とも理解でき、「シモンの教会への服従は表面的なものでしかない」と断じるカトリックおよびプロテスタント両派の証言が真実味を帯びはじめる。⁷³とはいえ、シモン自身の信念の問題を論じ得るためには、まずシモンの膨大な著作と書簡をくまなく精読する必要があるだろう。それまでは、シモンの心の内は謎としか言いようがなく、ここではポール・アザールの次の言葉を引用するだけに留めたい。

しかし、内面の葛藤があったとしても、そんなことを彼はおくびにも出さない。その信仰のありようを正確に知ろうと思ったら、身の危険を感じて自らの手で焼いてしまった膨大なノートを読まなければなるまい。ノルマンディー地方のボルヴィルに主任司祭として隠棲していたリシャール・シモンは、或る日地方長官に呼び出され訊問を受けた。次は書類の押収だと思ったシモンは、それをいくつかの大樽につめ、夜の内にとある牧場までころがして行って灰にしまった。この人の心の底は神様でなければ知りようがないのである。[...] 学問以外はふりむきもしない学者として、彼は死ぬまで仕事を続け、教会の非難を浴びつつも、なお教会の頑固な息子として終始した。⁷⁴

いずれにしても、ボシュエからすれば、聖書の問題点に理性の光を当ててしまったシモンは、スピノザと同罪であった。1678年、パリで印刷を終えようとしていたシモンの『旧約聖書の批評的歴史』を、ボシュエは容赦なく叩いたのである。すでに本文1300部を刷り、タイトル頁、国王への献辞、正誤表を含む最初の折り丁を待つばかりとなっていた4月初め、ボシュエがたまたま目次を入手し、大法官ル・テリエに訴えてこの著作の差し押さえを要請した。差し押さえ命令はすぐに出され

⁷³ Paul Auvray, *Richard Simon 1638-1712. Étude bio-bibliographique avec des textes inédits*, Paris, Presses Universitaires de France, 1974, p. 168-169.

⁷⁴ ポール・アザール前掲書, p. 236.

た。6月19日、国王諮問会議は『旧約聖書の批評的歴史』の禁書を決定、さらに7月には3日間をかけて焚書が執行された。本書は1680年にアムステルダムで再び印刷されるまで、少数の情報通にしか知られなかったという。⁷⁵

神に直接由来するということ

ここで『宗教についての異議』に立ち戻るなら、『異議』の著者は、神がその教えを伝えるのに書物という手段をとったこと自体を否定し、代弁者としての人間の必要性も否定する。——神は限らない義と、限らない叡智を具えているので、人を教化するのに不完全な手段を用いない。書物や演説は不完全な手段であるから、神はそれらを用いない。したがって、書物や演説の上に立てられた宗教は神に由来しない、というのである。⁷⁶

さらに作者は、『異議』ノート3の全体をキリスト教の検討にあて、その第1節では旧約聖書を、第2節では新約聖書を検討して次のように述べる。

そうした書物がどこから来たかも、どのように書かれたかも、どのように保存されたかもわかっていないことは申しません。それらが偽造され改竄されたこと、中には失われた書物さえあったこと、それを再発見したと言う人たちがそ

⁷⁵ Paul Auvray, *op.cit.*, p. 46-47. 伊藤玄吾前掲論文, p. 326-327. 以上のほかに、以下4点のリシャール・シモン論を参照した。Jean Steinmann, *Richard Simon et les origines de l'exégèse biblique*, Bruges, 1960 ; Auguste Bernus, *Richard Simon et son Histoire critique du Vieux Testament. La critique biblique au siècle de Louis XIV*, 1869, Slatkine reprints, Genève, 1969 ; Henri Margival, *Essai sur Richard Simon. La critique biblique au XVII^e siècle*, Paris, 1900, Slatkine reprints, Genève, 1970.

⁷⁶ そのことは、次のような三段論法によって「論証」される。「手段は用いる者の性質に見合っています。書物や人間の口から出る演説は、人間に神の意志を教えるための、神の性質に見合った手段ではありません。

ゆえに、書物や人間から出る演説は、かつて今も神が人間にその意志を教えるため用いる手段ではありません。」(「第15の真理」『異議』p. 116 ; *Difficultés*, p. 203.)

「神は常に最も単純で手っ取り早い方法を用います。書物や人間の演説は最も単純で手っ取り早い方法ではありません。

ゆえに、神は書物や人間の演説という方法を用いませんでした。

ゆえに、書物や人間の演説に基づく諸宗教は神の道を通して来たものではありません。

ゆえに、それらは神に由来しません。」(「第17の真理」『異議』p. 124 ; *Difficultés*, p. 215.)

れの作者ではないかと疑うべきことも言わずにおきます。モーセのものではあり得ないことが無数の箇所で見られるということも指摘しません。⁷⁷

ここで3回続けて用いられる暗示的看過法は、『異議』の著者がスピノザやシモンの聖書本文批評をふまえていることを強く印象づける。彼はそこから自身の理神論の材料を取り出してゆく。第1節「ユダヤ人の書物〔旧約聖書〕について」の第1項「それらの書物は神のものか」と第2節「新約聖書」の第1項「この書物は神のものか」で聖書の内容の矛盾、不条理、非常識、不道德、背徳性等々を指摘し、あるいはヘブライ語の文法的な問題からくる不明瞭さ、理解不可能性を列挙し、聖書の神聖性を完全に否定するのである。

*

*

*

シャルルの時代にキリスト教の土台にヒビを入れる材料を供給したのは、多くの場合、キリスト教聖職者による著作であった。先に見たように、聖遺物崇敬の背後にある不正を明るみに出したのは、カルヴァン、ティエール、シモンのようなキリスト教聖職者たちである。また、アザールが指摘したように、プロテスタントの陣営ではソミュールの牧師ルイ・カベル⁷⁸が、ユダヤ人側ではスピノザが聖書批評をととして、キリスト教の内に堆積していた人造的な要素を明るみに出していった。さらにカトリック教会では、シモンより一世代上のカトリック司祭ジャン・ド・ローノワ（1603-1676）が、フランス各地に伝えられた聖人伝説や各修道会の創設にまつわる伝承を否定する論文を次々と発表して、「聖人狩り」「修道院特権の破壊者」

⁷⁷ *Difficultés*, p. 284-285; 『異議』 p. 178-179.

⁷⁸ Louis Cappel (1585-1658). 野沢協によれば、ルイ・カベルはリシャル・シモン以前におけるフランス最大の聖書批評学者で、当時支配的だった聖書の逐語神感説に対してさまざまな面から戦いを挑んだ。代表作 *Critica sacra, sive de variis quae in sacris veteris Testamenti libris occurrunt lectionibus libri VI...*, Lutetiae Parisiorum, 1650 『聖書批評、または旧約聖書の各書に見られる異文について』(1650)を初めとする著作により、その後の聖書本文批評に大きな貢献をした。『ヨーロッパ精神の危機』 p. 237-238参照。

などの異名を取った。シモンのほぼ同時代には、ベネディクト会の学僧ジャン・マビヨンが『古文書学』を著し、古文書考証の方法論を打ち立てていた。いずれの批評作業も、カトリック、ユダヤ、プロテスタントの著者たちがそれぞれの立場から、キリスト教が纏った後付けの要素を剥ぎ取り、宗教を純化する試みであったといえる。意志的にか否かはともかく、そうした活動がキリスト教の土台を揺るがし、『異議』のような著作に論拠を提供する結果につながったのである。

手島勲矢氏はスピノザが『神学・政治論』で提示した「歴史批判」の方法論を次のように説明する。

「歴史批判」とは、聖書テキスト原義にまわりついた「伝統」「伝承」「憶測」「誤解」「曲解」の「衣を剥ぎ取る」(プシャットの語根の原義)作業であり、〈聖書テキストがオリジナル＝始原において意味していたこと〉を回復する試みである。⁷⁹

引き出される結論は異なるとはいえ、リシャール・シモンの聖書研究もまた同じ方法論に貫かれていた。聖書本文の研究においても、またキリスト教会の経済システムの研究(『教会の収入源とその収入拡大の歴史』)においても、長い間に宗教が付け加えていったものの実像を曝き、それを剥ぎ取る作業が研究の中心を占めている。まさにそのような聖職者の対極にあって、聖書の権威を擁護し、キリスト教会が纏ってきた衣を死守するべく立ち回ったのがボシュエであった。1670年以来、フランス王太子の教育係を務め、フランスの政治・宗教界に大きな影響力を持ち始めていたボシュエにとり、シモンの『批評的歴史』を潰すのはわけもないことだった。ボシュエのそうした圧力が一因となって、フランスではシモンの聖書研究を直接に引き継ぐ者が出なかったと言われる。⁸⁰しかし、アザールが言うように、シモンは

⁷⁹ 手島勲矢前掲書, p. 111. 「「プシャット」という言葉は、「脱ぐ、はがす」という動詞の語根から派生した名詞であり、「テキストの文字通りの意味」(*sensus literalis*)を意味する。」同書, p. 199.

⁸⁰ ボール・アザール前掲書, p. 236; 伊藤玄吾, 前掲論文, p. 313-315; Paul Auvray, *op.cit.*, p. 173; Henri Margival, *op.cit.*, p. 311-312.

「多くの人々に新たな勇猛心を湧き立たせた」のである。『宗教についての異議』は、スピノザやシモンの歴史批評の姿勢に学びながら、しかしキリスト教が蓄積してきたそうした一切の人工的なものを剥ぎ取るだけでは足りずに、キリスト教それ自体も脱ぎ去り、自然宗教へと向かってゆく。「*sacré commerce*」という表現をきっかけにして『異議』の思想的文脈をたぐってゆくと、以上のような構図が見えてくるのである。